国立国語研究所学術情報リポジトリ

A pragmatic factor relevant to the use of the past form : A case study from Japanese and Korean

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 井上, 優, 生越, 直樹, INOUE, Masaru, OGOSHI, Naoki メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001965

『日本語科学』1（1997年4月）37-52　〔研究論文〕

過去形の使用に関わる語用論的要因

—日本語と朝鮮語の場合—

井上　優
（国立国語研究所）

生越　直樹
（東京大学）

キーワード
過去，テンス，タ，-ess-

要　旨

本稿では，日本語と朝鮮語の過去形「-タ」「-ess-」に見られるある種の用法のずれが「どの段階で当該の状況を発話時以前（過去）の状況として扱えるか」という語用論的な制約の違いに由来することを論ずる。具体的には次の二つのことを示す。1）日本語では，発話時において直接知覚されている状況が知覚された（あるいは開始された）瞬間だけをきりはなして独立の過去の状況として扱うことができる。2）朝鮮語では，当該の状況が直接知覚されている間は過去の状況として扱うことはできず，日本語のような「状況の最初の瞬間のきりはなし」はできない。

1．はじめに

本稿では，日本語と朝鮮語の過去形「-タ」「-ess-」（異形態 -ass-, -yess-）に見られるある種の用法のずれについて考察する[1]。（以下，朝鮮語の表記には Martin et al. 1967 のローマ字表記法を用いる。）

日本語の「-タ」と朝鮮語の「-ess-」の用法は基本的なところではきわめてよく似ており，かつその用法はいずれも「発話時以前（過去）の状況を表す」という線で位置づけることができる。

例えば，(1) では，動詞のシタ形，hayss-ta形（hayss-ta は ha-ta（する）の過去形）はいずれも「現在からきりはなされた過去」（鈴木1979）を表す。

（1）昨日田中さん<u>来た</u>？　いや，来なかった。

ecey, tanaka-ssi <u>wass-e</u>?　ani, an wass-e.（生越1993：102）

昨日　田中 氏　来た　いや 否定 来た

また，シタ形，hayss-ta形はともに「現在と結びついた過去」（鈴木1979）を表すこともできる。（この種の「-タ」「-ess-」が完了アスペクトを表すという見方はとらない。）

（2）田中さん（もう）<u>来た</u>？　いや，まだ来ていない。

tanaka-ssi <u>wass-e</u>?　ani，acik an wass-e.（生越1993：102（一部修正））

田中　氏　来た　いや　まだ　否定 来た

変化動詞（あるいは限界動詞）のシタ形，hayss-ta形が変化完結の直後に使える点も共通している。

（3）（電話に出て）

はい，お電話かわりました。

ney, cenhwa pakkwess-upnita.（伊藤1990:23）

はい　電話　　かわりました

さらに，「状態述語＋タ」には，発話時において存在することがらを「過去に一度見聞きしていることがら」として述べる回想（思い出し）の用法があるが，「-ess-」にも同じ用法がある。（この種の用法はムード的な用法として説明されることが多いが，基本的には発話時以前の状況を表すという線で位置づけることができる。）

（4）tayk-wi cenhwapenho-nun myechpen-i-ess-cyo?（菅野1987）

お宅　の　電話番号　　は　何番　　でした

（おたくの電話番号は何番でしたっけ？）

このように「-タ」と「-ess-」には類似点が多いが，以下に示す例では「-タ」は使えるが「-ess-」は使いにくいという違いが見られる。（以下，「??」は当該の例文の使用が不自然であることを表す。）

（5）（マラソンで。走ってくるトップの選手の姿が見えた。）

来た。

o-nta. ／?? wass-ta.

来る　　来た

日本語では「選手が走ってくる」のが見えればただちに「来た」と言えるが，朝鮮語では「選手が走ってくる」過程に注目している場合は「o-ta」（来る）の非過去形「o-nta」（来る）を用いるのが普通である[2]。

（6）甲：（すい星を観察するために望遠鏡をのぞいている乙に）

見える？／見えた？

poye?／?? poyess-e?

見える　　見えた

乙：（望遠鏡をのぞいたまま）

見えるよ。／見えたよ。

poye.／?? poyess-e.

見える　　見えた

日本語では，すい星を観察するために望遠鏡をのぞいている聞き手に「（すい星は）見える？」とも「（すい星は）見えた？」とも聞くことができる。また，答える方も「すい星が見えている」状態のままで「（すい星は）見えた」と答えることができる。しかし，朝鮮語では，いずれの場合も非過去形「poi-nta」（見える）を用い，過去形「poyess-ta」（見えた）は使いにくい。

（7）（北京市の地図を見ながら）

えーと，友誼賓館はと....。あった。

iss-ta／??iss-ess-ta.

ある　　あった

(7) はいわゆる「発見のタ」である。朝鮮語でも対象を発見した時に過去形「iss-ess-ta」（あった）が用いられることはあるが（後述），(7) のようにただ単に対象を見つけただけの場合は非過去形「iss-ta」（ある）を用いるのが普通である。

以下では，まず「-タ」と「-ess-」のこのような用法のずれを説明するための仮説について述べ，続いてその仮説のもとで説明することができる現象を例示する。

2．仮説

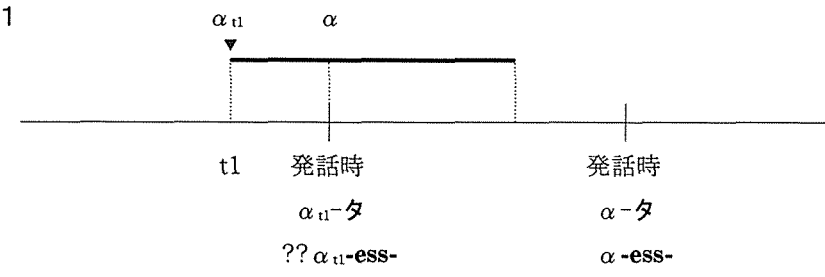
本稿では，前節の (5)～(7) にあげたような「-タ」と「-ess-」の用法のずれは，「-タ」と「-ess-」の基本的な意味の違いに由来するものではなく，「どの段階で当該の状況を発話時以前（過去）の状況として扱えるか」という一種語用論的な制約の違いに由来するものと考える。いわば，「発話時以前（過去）という基本的な意味がどのような語用論的な制約のもとで適用されるか」という視点から (5)～(7) にあげたタイプの「-タ」と「-ess-」の用法のずれを記述・説明しようというわけである。

具体的には次のような仮説を提出する。

1) 「α-タ」「α-ess-」はいずれも基本的には「状況αが発話時以前（過去）の状況である」ことを表す。
2) ただし，日本語では，発話時において直接知覚されている状況 α が知覚された最初の瞬間，あるいは状況 α が開始された最初の瞬間（図の α_{t1} の部分）だけをとりあげて独立の過去の状況として叙述することが容易である。
3) 一方，朝鮮語では「状況 α が直接知覚されている間は過去の状況として扱えない」という語用論的な制約が強くはたらき，原則として，状況 α が直接知覚できなくなってから一定の時間が経過した後，あるいは状況 α について話し手が一定の完結感を感じた後に状況 α 全体が過去の状況として叙述される。日本語のような「状況の最初の瞬間のきりはなし」はできない。

簡単に図示すれば次の図１のようになる。

図１



以下，第３節から第６節では，上記の仮説のもとでとらえることができる現象を，状態述語，知覚動詞「見える／poi-ta」，移動動詞「来る／o-ta」，動作動詞（主体動作動詞）の四つのケースに分けて見ていく。

３．状態述語の場合

3.1.「状態が観察された最初の瞬間のきりはなし」の自然さ

前節で述べた日本語と朝鮮語の違いは，状態述語文において最も明確な形であらわれる。

まず，当該の状態に関する意識的な観察行為が発話時以前に存在したとはいえない文脈では，日本語でも朝鮮語でも，現在知覚されている状態について過去形を用いることはできない。

（８）（学会で。現在Ａ会場とＢ会場で研究発表がおこなわれている。学会の庶務委員である甲が同じく庶務委員である田中を探している。）

甲：（たまたまＡ会場の入り口のところで発表を聞いていた知人の乙に）

田中さん見なかった？

乙：（田中がＡ会場の聴衆の中にいることを前から知っている。聴衆の中に田中がいるのを指さして）

あそこに いるよ／??いたよ。

ceki　iss-e／?? iss-ess-e.

あそこに いる　いた

しかし，日本語では，当該の状態に関する意識的な観察行為が発話時以前に存在したという文脈では，現在知覚されている状態について過去形を用いることができる。朝鮮語では，このような文脈にあっても，現在知覚されている状態について過去形を用いることはできない。

（９）（学会で。現在Ａ会場とＢ会場で研究発表がおこなわれている。学会の庶務委員である甲と乙が同じく庶務委員である田中を探している。甲はＡ会場の中をのぞいて探したが田中の姿は見あたらないので，Ｂ会場に行った。）

甲：（Ｂ会場の入口のところで会場の中を見ている乙に）

田中さんいた？

乙：（聴衆の中に田中がいるのを指さして）

あそこに いるよ／いたよ。（→観察してみたらあそこにいたよ）

ceki　iss-e／?? iss-ess-e.

あそこに いる　いた

つまり，日本語では，発話時において知覚されている状態 α が観察された最初の瞬間だけを「（観察したら）α だった」という形で独立の過去の状況として述べることができる。（それによって「観察行為の結果，状態 α の存在が判明した」という過程が発話時以前に存在したことが暗示される。詳細は井上（近刊）を参照されたい。）しかし，朝鮮語ではこのような「状態が観察された最初の瞬間のきりはなし」はできず，状態 α の存在が直接知覚されなくなり，状態 α 全体を現在からきりはなされた形で存在した状態として把握できるようになってはじめて過去形「-ess-」が使えるよ

うになる[3]。

以下，類例を見ていく。

(10)（捜査員が容疑者のアジトを捜索中に偶然隠し部屋を発見した。中を調べる前に捜査員が，隠し部屋を目の前にしたまま，無線で捜査本部に連絡する）

地下に隠し部屋が ありました／ありました。　これから中を調べます。

iss-supnita／?? iss-ess-supnita.

ありました　　ありました

日本語では，眼前の「隠し部屋がある」状態に注目したまま，「（捜索してみたら）ありました」という意味で過去形「ありました」を用いることができる。発見の瞬間に観察された状態だけを独立の過去の状態として叙述し，「観察行為の結果，当該の状態の存在が判明した」という過程が存在したことを暗示するわけである。一方，朝鮮語では，眼前に存在する状態は原則として現在の状態として述べられ，過去形「iss-ess-ta」（あった）が使えるのは「隠し部屋がある」現場を離れた後である。

(11) 甲：ここのキムチはおいしいですよ。食べてみてください。

乙：そうですか。じゃ，ちょっと。（一口食べて，辛そうな表情をする）

甲：（乙が辛そうな表情をした直後に）

辛いですか？／辛かったですか？

mayweyo?／?? maywess-eyo?

辛いです　　辛かったです

日本語では，聞き手が辛そうな表情をしている最中でも，「（食べてみたら）辛かったか？」という意味で「辛かったですか？」と聞くことができる。「現在どう感じているか」とは別に「食べてみた瞬間にどう感じたか」が問題にできるわけである。一方，朝鮮語では，発話時において聞き手が辛さを感じていると判断されるかぎりは非過去形「mayweyo?」（辛いか）を用いる。過去形「maywess-eyo?」（辛かったか）が使えるのは，辛さがおさまったと判断された後である。

(12) 甲：体重は何キロですか？

乙：最近はかってないんで，よくわかりません。

甲：じゃ，そこの体重計ではかってもらえますか。

乙：はい。（目の前にあるデジタル式の体重計にのり，数値を確認する）

甲：（乙が数値に注目している最中に）

何キロですか？／何キロでしたか？

myech-khillo-yeyyo?／?? myech-khillo-yess-eyo?

何　キロ　です　　何　キロ　でした

乙：（数値に注目したまま）

60キロです。／60キロでした。

60-khillo-yeyyo.／?? 60-khillo-yess-eyo.

キロ　です　　キロ　でした

日本語では，計測結果に注目している聞き手に「(はかってみたら) 何キロでした？」と聞けるし，聞かれた方も計測結果に注目したまま「(はかってみたら) 60キロでした」と答えることができる。「計測結果が出た瞬間に自分が観察した数値は60キロだった」というわけである。朝鮮語でも，計測をやめれば「さっきはかった時には60キロだった（もう一度はかったら違う結果がでるかもしれない)」という意味で過去形「60-khillo-yess-eyo」(60キロだった) が使えるようになるが，計測結果に注目したまま過去形を用いるのは不自然である。

(13) (甲の子供が無事生まれた。甲，病院から母親に電話をかける。)

甲：今生まれたよ。

母：そう。それはよかった。

a. で，どっち？ 男の子？ 女の子？

kulentey, enu ccok-iya? atul-iya? ttal-iya?

それで　どっち　だ　男の子だ　女の子だ

b. で，どっちだった？ 男の子だった？ 女の子だった？

??kulentey, enu ccok-i-ess-e? atul-i-ess-e? ttal-i-ess-e?

それで　どっち　だった　男の子だった　女の子だった

甲：a. 男の子だよ。／atul-ieyyo.

男の子です

b. 男の子だったよ。／??atul-i-ess-eyo.

男の子でした

日本語では，子供が生まれてからしばらくの間は，自分の子供の性別を「(見てみたら) 男だった」というふうに，性別が判明した瞬間に観察された目撃情報として述べることができる[4]。これに対し，朝鮮語では，自分の子供の性別を過去形で述べることは不自然である。「自分の子供が男か女か」という恒常的な属性は単なる目撃情報としては述べにくいということであろう。

3.2. 発話時において存在する状態について「-ess-」が使えるケース

前節で述べたように，朝鮮語においては「当該の状態が直接知覚できる間は過去の状態として扱えない」という制約が強くはたらく。しかし，

話し手が発話時以前からもっていた仮説が正しかった，あるいは誤っていたことが検証され，「本当のところはどうであったか」が理解できた。

という場合は，「やっぱり…だったのだ（本当に仮説のとおりだったのだ)」あるいは「本当は…だったのだ（仮説は誤っていたのだ)」という意味で，発話時において存在する状態について過去形を用いることができる。(日本語でこのようなニュアンスを表す場合は通常「のだ」を用いる。)

(14) 甲：その電話番号，間違ってますよ。

乙：あ，やっぱりそうでしたか。前からおかしいとは思っていたんですが。

a, yeksi kulayss-kwuna.

あ　やはり　そうだった　詠嘆

(15)（同じぐらいの年齢と思っていた聞き手が実は6歳年下であると聞かされて）

そんなに若かったの？

kuleh-key celm-ess-e?

そんなに　若かった

(16)（格好から女性だとばかり思っていた眼前の人物が実は男性であると聞かされて）

あの人，男だったの？

ce salam, namca-yess-e?

あの 人　男　だった

(14) では「やはり自分が考えていたとおり『間違っていた』のだ」という意味で，また (15) (16) では「自分の仮説は誤りだったのであり，本当は『若かった（男だった）』のだ」という意味で過去形「kulayss-ta」（そうだった），「celm-ess-ta」（若かった），「namca-yess-ta」（男だった）が用いられている。発話時以前から事実として存在していた（が話し手は知らなかった）ことが発話時において理解できたというわけである。

このことは「-タ」「-ess-」のいわゆる発見用法の具体的な内容について考える上でも重要である。

日本語の「-タ」の発見用法とは基本的に「（観察してみたら）α だった」という意味の文である。つまり，発見時に観察された状態 α を眼前の状態 α からきりはなして叙述し，発話時直前に「観察行為の結果，状態 α の存在が判明した」という過程が存在したことを暗示するわけである。これに対し，朝鮮語の「-ess-」の発見用法とは基本的に「やっぱり α だったのだ／本当は α だったのだ」と発話時以前から事実として存在していた本当の状態を理解したという意味の文である。

したがって，日本語では発話時直前に一定の観察行為がおこなわれていればそれだけで「-タ」が使えるが，朝鮮語では話し手が発話時以前からもっていた仮説の正しさや誤りが検証されたという文脈でなければ「-ess-」は使いにくい。

(17)（北京市の地図を見ながら）

えーと，友誼賓館はと....。あった。

iss-ta.／?? iss-ess-ta.（=7）

ある　　あった

この場合，話し手はただ単に対象がどこにあるかを探しているだけで，ある特定の仮説を検証しようとして対象を探しているわけではない。このような文脈にあっては，「（探してみたら）あった」というのは自然だが，「（あるとは思っていたがやっぱり）あったのだ」あるいは「（ないと思っていたら本当は）あったのだ」というのは文脈にそぐわない。(17) の文脈で「あった」が使えて「iss-ess-ta」（あった）が使いにくいのはそのためである。

次の例では，朝鮮語でも過去形「iss-ess-ta」（あった）を用いることができる。

(18)（なくしたと思った傘が見つかった）

あ，こんなところにあった。

a!　yeki iss-ess-ney.

あ　ここに あった 気づき

朝鮮語では，(18) の文脈で「iss-ess-ta」(あった) を用いると「(なくしたと思っていたが本当は) こんなところにあったのだ」という意味あいの発話になる。一方，日本語の「あった」は基本的には「(よく見たら) こんなところにあった」という意味の発話であり，朝鮮語で「iss-ess-ta」(あった) を用いた場合とはニュアンスが異なる。類似の用法のように見えても具体的な意味は異なるのである。

「発見のタ」は当該の状態に関する予想や期待の存在を前提にして用いられるといわれる (寺村1984など)。しかし，日本語では何らかの観察行為がおこなわれていればそれだけで「-タ」が使える (ただし，話し手が観察行為をおこなう背景には何らかの予想や期待があることが多い)。当該の状態に関する具体的な予想や期待の存在を前提にして用いられるのはむしろ朝鮮語の「-ess-」の方である。

4. 知覚動詞「見える」「poi-ta」の場合

「当該の状況が直接知覚されている間は過去の状況として扱えない」という朝鮮語の制約は知覚動詞においても明確な形であらわれる。ここでは視覚動詞「poi-ta」(見える) について見る。

(19) 甲：(すい星を観察するために望遠鏡をのぞいている乙に)
見える？／見えた？
poye?／??poyess-e?
見える　　見えた
乙：(望遠鏡をのぞいたまま)
見えるよ。／見えたよ。
poye.／??poyess-e.
見える　　見えた　　(=6)

日本語では，すい星を観察するために望遠鏡をのぞいている聞き手に「(すい星は) 見える？」とも「(すい星は) 見えた？」とも聞くことができる。また，答える方も「すい星が見えている」状態のままで「(すい星は) 見えた」と答えることができる。やはり，「すい星が見える」状態が知覚された最初の瞬間 (あるいは「すい星が見える」という状況の開始の瞬間) を発話時における「すい星が見える」状態からきりはなして独立の過去の状況として叙述することができるのである。

これに対し，朝鮮語では「すい星が見えている (見えている可能性がある)」という場面では過去形「poyess-ta」(見えた) は使えない。現に見えている (見えている可能性がある) ものについて過去形を使うのはおかしいのである[5]。

次の例についても同じである。

(20) (3Dアート (焦点を定めずにぼんやり見ると特定の像が浮き上がって見える絵) を見ている。コツがつかめずなかなか像が見えない。何回かやっているうちにやっとコツがつかめて，像が浮き上がって見えてきた。)
見えた。
poi-nta.／??poyess-ta.
見える　　見えた

5．「来る」「o-ta」の場合

次に，「来る」「o-ta」の過去形「来た」「wass-ta」の使われ方について見ていく。

「来た」「wass-ta」はいずれも移動が完了した直後に用いることができる。

(21)（バスが停留場に到着したのを見て）

来たぞ。／wass-ta.

来た

問題は「対象が話し手のところにむかって移動中である」ことが知覚された段階で「来た」「wass-ta」が使えるかどうかであるが，この点についてもこれまで述べたことがほぼそのままあてはまる。

日本語では「対象が来る」ことが知覚された最初の瞬間（すなわち話し手に知覚可能な移動の最小量が実現された瞬間）だけをとりあげて「来た」と言える。しかし，朝鮮語では対象が移動する過程に注目しているうちは非過去形「o-nta」（来る）を用いる。日本語のように移動が知覚された最初の瞬間だけを独立に叙述することはできない。

(22)（マラソンで。走ってくるトップの選手の姿が見えた。）

来た。

o-nta.／?? wass-ta.（=5）

来る　　来た

日本語では，「選手が走ってくる」のが見えれば「走ってくる」過程に注目していても「来た」と言えるが，朝鮮語では「走ってくる」過程に注目しているかぎりは非過去形「o-nta」（来る）を用いる。

「道を歩いていたら雨が降り出した」という場合，日本語では「雨が降ってきた」と言うが，朝鮮語では「pi o-nta」（直訳は「雨来る」）と言う。これも，日本語では「雨が降ってくる」状況が開始された（すなわち「降ってくる」状況の最小量が実現された）段階で「降ってきた」と言えるが，朝鮮語では「降ってくる」過程に注目しているかぎりは「pi wass-ta」（雨来た）とは言えないということである。

ただし，朝鮮語でも，対象の移動が知覚されれば話し手にとっては移動が完了したも同然であり，発話時の段階では移動の過程に注意がむけられていないという場合は，「対象が来る」のを知覚した段階で過去形「wass-ta」を用いることができる。

(23)（夫の帰りがいつになく遅い。「いつ帰ってくるか」と思いながら待っていると，夫がアパートの階段をのぼってくる足音が聞こえた）

あ，帰ってきた。

a, wass-ta.

あ 来た

(24)（課長が外出しているのをいいことに若い社員が仕事をさぼっている。そこに，課長が帰ってくる足音が聞こえてきた。）

あ，帰ってきた。

e, o-nta.／e, wass-ta.
あ 来る　　あ 来た

(23) で過去形「wass-ta」(来た) が用いられた場合，話し手は「夫が来る」ことが知覚された段階で一定の完結感を感じており，「夫が来る」過程には直接注意をむけていない。話し手の関心が「夫が来るか否か (いつ来るか)」ということに集中しているため，「夫が来る」ことが知覚されれば話し手にとっては「夫が到着した」も同然ということになるのである。

(24) においても，話し手が「課長が来る」過程に注意をむけていれば非過去形「o-nta」が用いられるが，「課長が来る」ことを察知してただちに次の行動 (例えば仕事をしていたようなふりをする) にうつるという場合は過去形「wass-ta」が使える。その場合，話し手にとっては足音が聞こえれば到着したも同然であり，もはや話し手の注意は移動の過程にはむけられていない。

日本語では「対象が来る」ことが知覚されればただちに「来た」と言えるため，移動の過程に注目しつつ「帰ってきた」と言うこともありうるし，足音が聞こえれば到着したも同然として一定の完結感を感じつつ「帰ってきた」と言うこともありうる。

6．動作動詞 (主体動作動詞) の場合

最後に，「動きが開始された直後であり，かつ動き自体は発話時においても継続中である (継続的な動きが眼前に存在する)」という場面で動作動詞 (厳密には主体動作動詞) のシタ形，hayss-ta形が使えるかどうかということを見ていく。

日本語では，発話時において話し手が動きの継続の過程に注目していても，その動きの開始の瞬間だけを独立させてシタ形で叙述することができる。一方，朝鮮語では，話し手が一定の完結感を感じた後でhayss-ta形が用いられ，動きの継続の過程に注目しているかぎりはhayss-ta形は使いにくい。

(25) (父親が電池で動く怪獣の人形のスイッチを入れた。動く人形であることを知らなかった子供が人形が動き始めたのを見て)
あ，動いた。
wumciki-nta!／?? wumcikyess-ta! (←wumciki-ess-ta)
動く　　動いた

日本語では，人形が動き始めれば「動いている」過程に話し手が注目していても (すなわち話し手が特に完結感を感じていなくても)「動いた」と言うことができる。動きの最小量が実現された段階で，その分の動きを眼前の「動いている」過程からきりはなして独立の過去の状況として扱えるわけである[6]。

一方，朝鮮語では，「動いている」過程に話し手が注目しているうちは非過去形「wumciki-nta」(動く) を用いる[7]。人形が動いている現場から離れれば過去形「wumcikyess-ta」(動いた) が使えるようになるが，日本語のように動きの継続の過程に注目したまま動きの開始の瞬間だけをとりだして過去形で叙述することはできない。

次の例でも，ただ単に「赤ん坊が笑い始めた (歩き始めた) のを見た」だけであれば，朝鮮語で

は非過去形「wus-nunta」(笑う),「ket-nunta」(歩く)を用いるのが普通である。(文脈によっては過去形が使える。後述)

(26) (赤ん坊が笑うようになってしばらくたった。ある日家で赤ん坊を見ていたらたまたま赤ん坊が笑い始めた。)

お,笑った。

a, wus-nunta.／?? a, wus-ess-ta.

お 笑う　　お 笑った

(27) (赤ん坊が歩くようになってしばらくたった。ある時,赤ん坊のところに目をやったらたまたま歩き始めた。)

お,歩いた。

a, ket-nunta.／?? a, kel-ess-ta.

お 歩く　　お 歩いた

ただし,朝鮮語でも,「ついに」「やっと」という気持ちが強い場合,すなわち動きが実現するか否かだけに話し手の関心が集中し,話し手が動きの継続過程に直接注目していない場合は,動きが開始された段階で hayss-ta 形が使える。動きが実現するか否かがわかれば十分という場合は,話し手は動きが開始された(すなわち動きの最小量が実現された)段階で一定の完結感を感じるわけである。

(28) (こわれて動かなくなった怪獣の人形を修理した。修理とテストを何度もくりかえした後ようやく動き出した。それを見てほっとして)

やっと動いた。

kyewu wumcikyess-ta.

やっと　動いた

(29) (なかなか泣きやまない赤ん坊を何とか笑わせようといろいろ試みた結果,ようやく赤ん坊が笑い始めた。)

笑った。

wus-ess-ta.

笑った

朝鮮語では,(28)(29)の文脈で過去形が用いられた場合は,話し手の関心は人形が動くか否か(赤ん坊が笑うか否か)に集中しており,動きが開始された段階で話し手は一定の完結感を感じている(動きの継続過程には注目していない)。(26)(27)でも,自分の子供が生まれて始めて笑った(歩いた)のを見たという場合は過去形「wus-ess-ta」(笑った),「kel-ess-ta」(歩いた)が使える。親にとっては自分の子供がいつ笑うようになるか(いつ歩くようになるか)ということはきわめて重要な関心事であるから,笑う(歩く)動作の最小量が実現されれば親としては一定の完結感を感じることになるのである。

日本語では発話時において知覚されている動きの開始の瞬間だけをとりだしてシタ形で叙述することができるため,完結感の有無はシタ形の使用の有無を決める重要な要因にはならない。(26)〜

(29) の文脈においても，話し手は一定の完結感を感じつつシタ形を用いているということもありうるし，動きの継続の過程に注目したままシタ形を用いているということもありうる。

7．まとめ

本稿では，日本語と朝鮮語の過去形「-タ」「-ess-」に見られるある種の用法のずれが「発話時以前（過去）という基本的な意味がどのような語用論的な制約のもとで適用されるか」という視点から記述できることを示した。

具体的には次の二つのことを示した。

1) 日本語では，発話時において直接知覚されている状況 α が知覚された最初の瞬間，あるいは状況 α が開始された最初の瞬間だけをとりあげて独立の過去の状況として「-タ」で叙述することが容易である。

2) 一方，朝鮮語では「当該の状況が直接知覚されている間は過去の状況として扱えない」という語用論的な制約が強くはたらき，原則として，当該の状況が直接知覚できなくなってから一定の時間が経過した後，あるいは当該の状況について話し手が一定の完結感を感じた後に状況全体が過去の状況として「-ess-」で叙述される。日本語のような「状況の最初の瞬間のきりはなし」はできない。

ただし，次のような場合は当該の状況が知覚された（あるいは開始された）段階で「-ess-」を用いることができる。

・話し手が発話時以前からもっていた仮説が正しかった，あるいは誤っていたことが検証され，「本当のところはどうであったか」が理解できた。（状態述語の場合）

・動きが開始された（対象の移動が知覚された）段階で話し手が一定の完結感を感じ，動きの継続過程（対象の移動過程）に話し手の直接の注意がむけられていない。（「来る／o-ta」，主体動作動詞の場合）

以上のことは，最終的には「-タ」と「-ess-」の基本的な意味の違いに還元させて説明することができるのかもしれない。しかし，現段階で必要なのは，「-タ」と「-ess-」の基本的な意味を抽象的な形で一般化することではなく，両者がそれぞれどのような文脈でどのような意味を表すために用いられるかということを（ある程度の抽象化を念頭におきながら）できるだけ具体的に把握することである。そして，「発話時以前（過去）という基本的な意味がどのような語用論的な制約のもとで適用されるか」という視点はそのような基礎的な記述をおこなう上で有効な視点なのである[8]。

注

1　朝鮮語の過去形は「末尾音節に -a, -o 以外の母音を含む語幹＋-ess-／末尾音節に -a, -o を含む語幹＋-ass-」という形をとる。母音語幹の場合は縮約がおこることがある。（ha-ta（する）の過去形は ha-yess-ta → hayss-taとなる。）待遇的な要因等により -ess-/-ass- の後の語尾はさまざまな形をとる。以下一例をあげる。（本文の説明中では -ta で終わる形で代表させる。）

基本形	過去形（非丁寧）	過去形（丁寧）
iss-ta（ある） （いる）	iss-ess-ta, iss-ess-e（あった） （いた）	iss-ess-eyo, iss-ess-supnita（ありました） （いました）
poi-ta（見える）	poyess-ta, poyess-e（見えた） （poi-ess- → poyess-）	poyess-eyo, poyess-supnita（見えました）
pat-ta（受ける）	pat-ass-ta, pat-ass-e（受けた）	pat-ass-eyo, pat-ass-supnita（受けました）
o-ta（来る）	wass-ta, wass-e（来た） （(o-ass-) → wass-）	wass-eyo, wass-supnita（来ました）

2　朝鮮語のテンスの対立は，基本的には日本語と同様「非過去（現在，未来）ー過去」という対立である。非過去形の語尾は待遇的な要因等によりさまざまな形をとろ。以下一例をあげる。（本文の説明中では -ta で終わる形で代表させる。）

基本形	非過去形（非丁寧）	非過去形（丁寧）
iss-ta（ある） （いる）	iss-ta, iss-e（ある） （いる）	iss-eyo, iss-supnita（あります） （います）
mek-ta（食べる）	mek-nunta, mek-e（食べる）	mek-eyo, mek-supnita（食べます）
poi-ta（見える）	poi-nta, poye（見える） （(poi-e) → poye）	poyeyo, poi-pnita（見えます）

3　日本語では，単なる目撃情報であれば，現場を離れた直後に当該の目撃情報を過去形で述べることができる（この場合意識的な観察行為は特に前提とならない）。朝鮮語では，現場を離れた直後の段階では過去形は使いにくいが，回想形（目撃法）と呼ばれる -te- は現場を離れてから比較的早い段階で使えるようである。（-te- については別の機会に論ずる。）

甲：（ソバ屋から出てきた乙に）
　田中さん見なかった？
乙：（出てきたばかりのソバ屋を指さして）
　a.　中にいるよ。／an-ey iss-e.（店の中でいっしょにいた場合でもよい）
　　中 に いる
　b.　中にいたよ。／?? an-ey iss-ess-e.（店の中で目撃しただけ）
　　中 に いた
　c.　an-ey iss-tela.（回想形：店の中で目撃しただけ）
　　中 に いる 回想

4　自分の子供の性別を目撃情報として述べることができるのは，子供の誕生からしばらくの間だけである。

（甲と乙が10年ぶりに会った）
甲：お子さんは何人？
乙：このあいだ小学校に入ったのが一人いるよ。
甲：a.　あ，そう。男の子？ 女の子？
　b.??あ，そう。男の子だった？ 女の子だった？
　　（ー??見たら男の子だった？ 女の子だった？）

5　他の知覚動詞，例えば「聞こえる／tulli-ta」についても基本的には同じことがいえる。

6　国立国語研究所（高橋太郎）（1985:183）は，
　ワンエンドワンから土屋，第３球。ランナーがはしった。

いま，家にいるもうひとりの姉ちゃんがいたでしょう。—ほら，きた，きた。

のような例（下線筆者）を「動作動詞のあらわす動作過程のうちの始発の局面だけをとりだして完成相の過去形でのべる」ケースとしてあげ，「このばあい，運動の局面はまだつづいているのだが，始発の局面は直前にまるごと完成している」という説明を加えている。本稿でもこの見方にしたがう。

7　朝鮮語にも動きの継続を表す「ha-ko iss-ta」（している）という形式はあるが，眼前で展開されている動きを叙述する場合は非過去形（ha-nta形）を用いることが多い。日本語でも，話し手のコントロールのもとで（あるいは話し手のコントロールに反して）動きが展開していくさまをとりたてて述べる場合はシテイル形よりもスル形を用いる方が自然である。

（餅をひっぱって）お，のびる，のびる。／?お，のびてる，のびてる。

8　主体変化動詞のシタ形と hayss-ta 形には，主体動作動詞の場合とは多少異なるタイプの用法のずれが見られる（生越1995,1997）。また，「シタ／hayss-ta」「シテイタ／ha-ko iss-ess-ta」の選択に関しても次のようなずれが観察される。

（妻が約束の時間に遅れて待ち合わせ場所にやってきた）

夫：遅いじゃないか。何やってたの？（??やったの）

mwel hayss-e? (??mwel ha-ko iss-ess-e?)

何　した　　何　していた

これらの点を含め，日本語と朝鮮語のテンス・アスペクト形式の選択に関するずれの全体像については別の機会に論ずる。

参考文献（ハングルはローマ字化）

伊藤 英人（1990）「現代朝鮮語動詞の過去テンス形式の用法について（1）—hayss-ta形について—」『朝鮮学報』137 朝鮮学会

井上 優（近刊）「現代日本語の「タ」—主節末の「…タ」の意味について—」 つくば言語フォーラム編『「た」の言語学』ひつじ書房

梅田 博之・村崎 恭子（1982）「テンス・アスペクト：現代朝鮮語」『講座日本語学11：外国語との対照Ⅱ』明治書院

生越 直樹（1993）「朝鮮語における過去の出来事を表す表現」『日本語とアジア諸言語との対照的研究—テンスとアスペクト—』科研費報告書（代表：鈴木重幸）

————（1995）「朝鮮語hayss-ta形，hay iss-ta形（ha-ko iss-ta形）と日本語シタ形，シテイル形」『研究報告集』16 国立国語研究所

————（1997）「朝鮮語と日本語の過去形の使い方—結果状態形との関連を中心にして—」国立国語研究所編『日本語と朝鮮語（下）』 くろしお出版

菅野 裕臣（1987）「朝鮮語のテンスとアスペクト」『学習院大学言語共同研究所紀要』9

金水 敏（1994）「いわゆる‘ムードの「タ」’について—状態性との関連から—」『言語の機能と類型に関する総合的研究』科研費報告書（代表：柴谷方良）

工藤 真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテクスト—現代日本語の時間の表現—』ひつじ書房

国立国語研究所（高橋太郎）（1985）『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』秀英出版

鈴木 重幸（1979）「現代日本語の動詞のテンス—終止的な述語につかわれた完成相の叙述法断定のばあい—」言語学研究会編『言語の研究』むぎ書房

高木 一広（1996）「「た」が関わる二種類の認知的側面について」『神戸大学留学生センター紀要』3

寺村 秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版

牟 世鐘（1994）「発見・思い出しにおける「ル」形と「タ」形」『日本語学』12-2 明治書院
南 基心（1978）『國語文法wi 時制問題ey 關han 研究』ソウル：塔出版社
徐 正洙（1992）『kwuke mwunpep-wi yenkwu（国語文法の研究）I（増補改訂版）』ソウル：韓国文化社
Martin, Samuel E. et al. 1967. A Korean-English Dictionary. New Haven: Yale University Press.

付 記

本稿は日本言語学会第111回大会（1995年10月17日，東北大学）でおこなった口頭発表の主要部分に加筆修正を加えたものである。多くの方にインフォーマントとしてご協力いただいたが，梁慶模氏，朴海煥氏，鄭恩禎氏には特に多くの時間を費やしていただいた。記して感謝申し上げる。

（原稿受理日：1997年1月20日）

井上 優（いのうえ まさる）
国立国語研究所日本語教育センター　115 東京都北区西が丘3-9-14
mainoue@kokken. go. jp
生越 直樹（おごし なおき）
東京大学大学院総合文化研究科　153 東京都目黒区駒場3-8-1

Japanese Linguistics 1 (April, 1997) 37-52 〔Article〕

A pragmatic factor relevant to the use of the past form:

A case study from Japanese and Korean

INOUE Masaru
The National Language Research Institute

OGOSHI Naoki
The University of Tokyo

Key words
tense, past form, *-ta, -ess-*

The forms of past tense in Japanese and Korean, *-ta* and *-ess-*, can be used similarly in most contexts. However, in a certain context the Korean speaker does not use *-ess-* while the Japanese speaker uses *-ta*. This results from the difference in a pragmatic constraint which is relevant to the use of the past forms.

In Japanese, the speaker can focus on the first moment of a situation which s/he recognizes at the speech time and describe it as an independent past situation. Thus, the speaker can use *-ta* as soon as the situation has started or has been recognized even though s/he recognizes it at the speech time. On the other hand, this focusing on the first moment of the situation is prohibited in Korean, thus the speaker cannot use *-ess-* if s/he recognizes the situation at the speech time.

In Korean, there are two exceptional cases in which the speaker can use *-ess-* in spite of the existence of the situation at the speech time: (1) a truth which could have been recognized before the speech time has been recognized at the speech time; (2) the speaker pays attention only to the realization of the action and pays no attention to its progress.